C—27　本邦農民服飾の研究 ― 衣料生産からみた服飾 I ―

和洋女大文家政　鷲羽綸子

目的　例年、近世以降の農民服飾の研究を行っているが、その土台である近世以前の農民服飾を知ることは非常に困難である。しかしそれを少しづつでも解明しようとするのが本研究の目的である。本年は古代産業の終りとして鎌倉時代を限り、数少ない手掛りである衣料の生産状態のあとをたどり、当時の生活を類推する。

資料　考古学資料、和歌、法令、史書、古往来、其他古文書類を主な資料として用いた

結果　古代から日本の衣料には渡来植物がみられるが、殊に国家体制がとっのってくると、織技をもって渡って来た人々を各地に分住させ、律令制のもとでは地方からも驚くほどの高級織物を租税として徴収している。しかし次第に高級な織技は中央や限られた土地のものとなり、地方では土地柄に則した産物を納める様になるが、このことは貢納品と彼等の実生活との接点を意味している。更に鎌倉時代には荘園制の名残りと幕政とのギャップの中でいよいよこの傾向が強まってゆくことが明らかとなった。